

Asano report

「初音の調度」に使われた表情豊かな梨子地粉。製法の記録は残っていない、ネットで散々探してみても文書の資料に行き当たらない。金粉製造を専門とする職人はいなかったということだろうか……室瀬さんにヒントをいただいて辿り着いたのが、埼玉県川越市の喜多院所蔵



梨子地粉の再現に貢献したこの道具は「国宝へようこそ」「日曜美術館」にも登場。

「紙本着色職人尽絵」(国指定重要文化財)。職人たち(25職種)が動く姿を描いた屏風絵です。蒔絵師の場面に、親方の傍らで鑊のような道具を使って金粉をつくる職人を発見、よく似た道具が浅野商店の倉庫に残っており、梨子地粉の再現に至りました。この道具は、以前、通常のラインナップにはない特殊な金粉の発注を受けた際の試作に使用したものの。この時の経験値があったことも梨子地粉の再現につながりました。「職人尽絵」に至る前にも、燕三条のこの道60年のベテラン職人さんと駆け出しの職人さんによる2つの鑊で削り比べたり、プラモデル用の鑊を使ってみたり、様々な試行錯誤を繰り返しています。今回の経験をふまえて、浅野商店では未来へとつなぐ金粉のレシピ作成に着手しました。後世の人たちが同じ金粉を再現することができるように。このプロジェクトに参加して、蒔絵・漆芸の世界では、混ざっていたり、塗だったりする金粉も求められることを知り、価値観の違いに衝撃を受けました。それまでは「より細かく」「より小さく」「より丸く」「粒が揃っている」金粉を目指し、工業製品の発想で製造を行ってきたのです。様々な価値観を受け入れ、多様な金粉を供給していきたい。それが浅野商店の新たなミッションとなりました。



あしらい毛棒

蒔絵師の道具箱

室瀬和美さん

「初音の調度」復元模造の鍵となる道具についても、室瀬さんにお話をうかがいました。テレビ番組の中では蒔絵筆が紹介されていましたが、他にはどんな道具があるのでしょうか。「初音の梨子地の地塗りを薄くむらなく広げるのに使う刷毛、私たちは溜刷毛と呼んでいます。50年近く前に京都の職人さんが亡くなり、むらなく塗れて、刷毛目がつかず、腰が強い、と三拍子揃った溜刷毛をつくれる方がいなくなっていました。5年以上かけてやりとりをして、広島の方屋さんが見事に復元してくださいました。今や全国の蒔絵師はあの溜刷毛がないと仕事ができない、というくらい質の高いものです。もう一つは、金粉を蒔いたあと掃き寄せたりぼかししたりする作業に使うあしらい毛棒。毛のいいものがなく、金地に筋目がついていましたが、これも復元が実現しました。何れも過去のものレベルを超えていて、何でも昔のものがいいとは言えない、工夫を重ねれば今の方がいいものをつくることできる、と心強く思いました。つくる技術の継承と、道具の継承は同時に行なっていかなければならない課題。復元模造をやる意味はそこにもあると思っています。」



(写真上)「初音蒔絵調度」。寛永16年(1639年)、三代将軍家光の愛娘千代姫が尾張徳川家二代光友に嫁ぐ際に持参した婚礼調度。国宝。文様の多くが源氏物語の初音の帖に題材を得ていることから「初音の調度」と呼ばれる。江戸時代を代表する蒔絵の名品。

(写真下)「初音蒔絵調度文台・硯箱」。今回のプロジェクトで、この2件の復元模造が行われる。2030年完成予定。

徳川美術館所蔵 © 徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

国宝初音の調度

皆さんは昨年放送されたテレビ番組「国宝へようこそ第17集」「日曜美術館初音の調度」をご覧になったでしょうか?その中で紹介されていた「初音の調度」復元模造は、浅野商店にとってもビッグプロジェクトです。

「創刊号の「つなぐ」人として、このプロジェクトを手がける蒔絵の人間国宝室瀬和美さんにお話をうかがいました。

つなぐ人が語る一品巻

重要無形文化財「蒔絵」保持者

室瀬和美

ようやくスタートラインに

「初音の調度」は、徳川美術館さんと材料・技法の調査会を行ない、何度も見せていただきました。幸阿弥長重の卓越したプロデュースで一堂に並ぶと統感がありますが、個々の仕事をみていくと、複数の工房が同時に携わっているのか、技術者の「手」が違うし、金粉のつくりや蒔き方も異なります。細かいところを見ていくと金粉の粒子・色が違っていて、中でも特殊な感じを受けたのは、昨年来、浅野商店さんに再現してもらった金梨子地粉です。

金粉の形はルーペで比べられても、純度だけでは感覚では難しく、科学的アプローチで金粉を再現できないかと調査を始めたのですが、金粉をぼかしながら蒔いていたり、下に別の蒔絵層が見つかったりして「一筋縄ではいかない。データが金粉の純度にはそのままつながらない。こんなに複雑で足踏みするとは思わず、調べれば

ものに学んで、次世代につなぐ

藝大の恩師松田権六先生から「ものに学ぶ」精神を受け継ぎました。私が十九歳の時に教わったのは、「正倉院に学べ」に始まり、既成概念・情報を全て外してもと対峙すれば、ものから学べることは山ほどある。千三百年を超える日本の蒔絵文化の歴史を一つ一つ引継いでいくには各時代の情報を知らなければならぬが、伝わっていない技術・材料はたくさんある。人から学べるのは百年や百五十年の技術で、どんなに偉い先生から学んでもせいぜい三代遡るくらいの技術情報しかない。その前の時代の技術や材料づかいはものから学ぶしかない。日本は文化財としてものがたくさん残っているのだから、そこからまだまだたくさん学べるはず。自分のアンテナを高くして、ものと対峙していけ、ということでした。

ものと対峙すると一つ一つその時代の技術者の工夫、技術、新しくチャレンジしようとする精神が見えてきます。「伝統」は、先人から受け継いだものをそのまま真似して今の時代につなげるということではない。常に新しくアイデアを重ねてチャレンジしていくのが本来の「伝統」だと、私自身、ものから学んで自分なりの方向性を見つけました。それが今、私を支えています。

「伝統は守るものではなく創り上げるもの」

これは教わったことではなく、私自身の「伝統」の理論です。技術をそのまま伝えていくのは伝承であって、伝統とは違う。伝統は古いことを常に繰り返していると思われがちですが、表現や技術の中にクリエイティブティがあるからこそ、伝統は時代の特徴を表現できる。表現者の

調べるほどハードルが上がっていききました。

技術的なところで発見だったのは高蒔絵の肉取りの仕方です。私が学んできたオーソドックスな高蒔絵技法では、下地が仕上がってから高く盛り上げたレリーフをつくるのですが、初音は中塗りの状態で高蒔絵を施しています。同じ幸阿弥家が伝えた高蒔絵の技術が、十七世紀初頭と十九世紀とはこんなにも違うのかと驚きました。

こうした材料や技術の細かい分析は、テレビ番組の中では語られませんが、「つくる」という大前提で調べてはじめてわかることが山ほどあって、「○○だろう」では前に進みません。これまでの調査の積み上げから、かなり核心に近いところまで迫れる調査を一年半くらいかけてやってきて、ようやくスタート準備に入ったところでした。

試作の失敗の数だけ金粉復元に近づきます。どこまで精度が上がるのか誰も見えていない状態で、手探りしながら技術者側と材料製作者側のすり合わせをしていかないと結果が出ないと思います。この一番大変なところを乗り越えないと復元の意味は見えてこない。十七世紀初頭の材料や技術にできるだけ迫り、わかったことをきちんと伝えて次世代に残すことが一番の使命です。

そう考えると、金粉の試作の繰り返しは欠かすことができません。喜多院の「紙本着色職人尽絵」から、当時は各工房で金粉もつくっていたため、工房単位で金の純度や形、蒔く技術が違うだろうと想像しています。形も粒子も不揃いの金粉が初音の一部に蒔かれているので、そういう金粉を使いたい。通常は精度の高い金粉をつくってきた浅野商店さんに無理をお願いすることになります。金粉復元製作を

工夫が入っているからいつの時代の仕事かわかるのであって、皆が同じことをやっていたら、どの時代のもかわからない。イノベーションが伝統を支えてきたのだ、ということをものから学べるわけです。

「初音の調度」をつくった人々は、金のグラデーションの色彩が感じられるものにしたかったのではないのでしょうか。私は「金の絵画」をイメージし、このプロジェクトに取り組んでいます。私たちは十七世紀初頭の技術者がどんな気持ちで、どういった材料と技術を使って表現したかの代弁者でもあると思っています。四百年間の橋渡しとして、仕上がった初音をぜひ見ていただきたい。四百年前と現代を行き来しながら、ものと対峙してきた時代を超えるメッセージを感じていた



室瀬和美(むろせ かずみ)

1950年東京生まれ。東京藝術大学大学院(漆芸専攻)修了。2008年、重要無形文化財「蒔絵」保持者(人間国宝)認定。紫綬褒章受章。創作活動とともに漆文化財の保存・修理に取り組み、国内外で漆文化を未来につなぐ活動を行なっている。

